うつ保物語

菊乃孫

下

十一 上全

特別
へ12
4327
11

178

ひぢかさ雨 四十八ウ

源宰相ノ ムスメ袖君 / ムスコ 二サコ 卅六ウヨリ〇ル

カウフリ柳 四十二オ

白本 葉エシ 九オ

今本 十 葉の緑下

絆本 葉の緑下 五丁下

大トノハ タリ

藤人かれ タリ

もりしくなかる人なかりし。左大将殿にもうそかゝら
ゐあやまたくまうのかりそめもきこえさせ給ふ
題ぞくことはへれどおはしまさいつ。左大将殿は
うちにくみをまうの給ひとりくてさされさ
とのこそことよへせさなかれ。おほんをりまうの給
へ。おほきみうせ給ひてやまとさこえ給ふさへ
いまゝらはみなをさけ物なりし藤人のかゝ将とは
つゝみうくうきこえしてまうつ給。
蔵人のういとよそせさらく侍ふゆよるい
代ゆみのすのもれたまひしてたくさまうつ給ふ
まゑくつる衛門あるこゝろの山つさ

正頼

門 へ 12
號 4327
巻 11

昭和十二年四月一日
高田早苗氏寄贈

きりしくかる人まなし。左大将殿なむそれから
ないやうくおほかたの御子ありくせくしきめ
わづらひくいつれもあはしともいかゞ。左大将殿まへ。
うちくみをおほかたの御ためとおもひてきこえさ
せのことよへせうなかれ。のたまふにやむごとなき
へ。あらさるうせなしつくやまくさゝえ給ふさ
のまうちみそふさけ物なりし麗人のお待とは
つひくゝくさてしまてよろづ給。
紫ふうらいとこはとせむらく御乃ふまうれ
代はあまたの年をへてたくさうる給ひつ
まゝとゑくうさ海はなおうとくこゝろの山のさ

物まうでありくくらうえ給
ましれつむのへとはおもひてきこえ給はあれとも山
のこほり川をそひぐなきさえのふうくてまゐるかり
給ぐんしかめでてこのかはは女郎のほとりえかなにはおそれ
まる志とれ宿ようけつてあふ。なくかぬちには志ら
さくしさきえも女よいさうそくひとつて参ちの
院よも殿よ人々やつまさやそれ給のあかくていと
うそくたる殿より給はつはるまうもんのみかく
よみさてけぐらむしらまうれ思ひさるく
めくれむまちかんしちめうつぬ人しむまよふ
くつくりまら給ひ中将給ひの志いむまらまう

そへとりふ そそとそふ よ

へいゐゑとゝりてかくつゝりつかぐくりて中将
よの中のくはうゐますしかうさおもはれに殿そつ
き給ひとらふ上達部よりそこかしこにいひそめちに
われみなおもてそこえれけれ中将のほうらは三条大
弁世界よりかれりいかにしそかうすふと給ひ
さふれらしよの上はいそしかりつかぬかれ涼氏法
中ねるなくらみつえうるもえくられたまへのおさ
まふさくうつふそれ侍からかなちそまうつらん
中将のほかりのはざとかもちかもそこかやこ
こゝちらしさてまうかりやこなひてうり山ま
てとれときゝすぬあいかれしつとのはくくら

まめやかにて宮よりまつりに、春宮より一日のことされ
しるしもなくてひたすらにおりゐまへしよいまゐ
のまかせたまひてきこえむとすや
春宮
ことにいらへ申けむ御袖をもひちぬれたまへし
からしときこえつくまゝに、みやこにけやなとあふみにゆき
しきみのゆへりけれるはゆのかれとさくしまうたま
よくらんて給
しみへき御袖のひかれたりけるにかはりける給
みやうりものそすれたかくいひしらすかきくさもや
とり
春宮
いつみのうちにあかしたてまつらんとおもふに

よきかしもせしなりしかをわかしむやこの給
をそ給へわくみや
くもゐにさかしうかみちわらひのあはれなれ
ふれ給ひやかうへんと云ひすきなかれとしことに
給へりくて春宮よりそともしもこの御へたてゝ
大宮
まいりとて、さゝえ給へるしいもゐをしはやまく
うしくはなつかしの御かたを見
めでたかりたまひむひまてたれのせいつしさたえん
とりて、おとは山をやしはなつはくのれんそけ
うしろ山のさのいまそてもりたまへくむなや
給へみなんすさたりかもの源宰相はふらんかなかり

こそカ ぬカ

左ハ右ノ誤字兼雅ナラン

みな海をみまつて、浪のうへにこぎいでたるをいひけれは、
ゆき人は九十のことをしれまくかきをかへしけるにつけてはかなく
とゆらみつゝしていくさとをるへきを
この紫の色をさすところも早はつきさるそくた
つまくとるすゑんとそするいくやうてさえにつきの
ちるそかなえぬうちてはのこしこゝろとなしはなへかなへは
つれなくかゝりひくつくかく、花ちらすくさ
あえさせて、あめそあうみにまうくやうもみえぬも
はくもぞらくさせてしれいはつりなりてらう
よるいくをそとうてまとはゝくりまかし
にたれもはまいさてさせむと、いとししけまゆきまた

川といふところの名をしてかへしくや
やまとの川あれはえ神はあれとさみは
きのふく時のさきうれ、御月の月をえこそ
らしらへをあらぬまれとさしてまうでおくことやと
はく、ちおのつかさまへ御かりのもの能をといひ
ひて、こまうれとくはらくれせかし、芸能つくえあり
くすからくしふやうあれともいのまへ、あめの
れまされはくく御ちのおひら絵まいらせく
あまの川にもつくゆくうちなれりのとはなれ
はえさうてはふ心のあれいそしやいとも海よりむと
とふくまくり、平中納言うくめてらひ絵ならさもよ

ふかく海へいりまつて、庭のこうかげを紀ちれまいは
世の人のみなとゝもれまてくさゝたにつけ侍らず
さくらかうして、うくさこゝえまつ
この紫もさるこゝも思はつきさそてた
つまくとるすゑんとてすらいてやらてさはつきの
さそ世侍そね、山のこ後のとしころ世しいのえんかさい
つれとうも、うらおかく人つてぬくぬ、藤のちらのもさ
らえさせて、藤とあるすらのこゝやくとも見えそ
ほくまてきくさせてしれ、思ひつたまつてら
よるもいてぬそこゝえてきまは仕うりまゐりし
たちぬ世はこゝててさせむと、いとうしらけまいまた

川とくらきのふもとしてなをいくや
やそろ川あれこれ袖はあれはれとさみい
さめうくはかるきられ、世かりくれとも月をえそて
うしらへをうかりぬまれとさらしまつ、おかくさやと
給ふくら世ものかき世もわりのもの給ふとい
のて、ごまられもくいうくはせかし、君給ひてえまう
かすかくとうらかやしあれともいの人、庭のうさ
れまされいうくくかりのいちはまほしく
やま川にもおもいくさるれりのとはられ
はまうつまふおうへあれはしやいうこ海よをむと
さらくまうか、平中納言のくはゝらかゑ給まてまよ

にほひもかはらずいまめかしう見ゆれば人々よまる
るゝぬ梅よりこそとくさけ

正明
身をしれはせんくさく人をとふかりま
さめ世のしれはれそらふはせんくはつろまてこの
こゝろのかうころ御むまへのこうらへの白ふ
さうらへり

紅梅

四郎君
それるすみのうちのかすかれなからつる花の枝
のふくもあるうちはえそくくてそるとらこと
え給ふ。藤中将

仲忠
涼川ふかくなりくいまはへやしれをいふ人の
たのまれうらん。さそのめうくは人のもうみつらむ

△こゝニ人ノ名脱タルベシ
三ノ御子すけドニヤ

やれところとしたまふ。源中将

京
あうそ海のはうきこの殺いしもあれれたかさふ
ちりのおき浅てそみのふるへつさうことそ御
え給ふ。かくつあし。御むまへのこのゑのちまふり
ちうとみ給てかくこゝて給
わうことや芸の山思ふとろうんかけきれこの
ありぬひもなし。山みとみらぬふらうそを
匂みとゝて給へいとふへここて給ふを。源宰相

実忠
のえぞくもるみくふをなりらめ。ふしそまや
人まえもぬとしむ。藤宰へのうちすけ

行正
あかねとへ人まかめんくなりぬれをわりあつさお

ともしてやかてむくとりひまふりこそいてしつ
られしもれ手をおりとうえいの人肉池とそこかしろふてら
かしきえよかくしらみ席上ゆうされくにけり
肉池の化禄さしてつ化ふをやりつきかき紙さ
時よはくつむかりやもかうりし北物かい紙化
人くむこにとりまふとうれをほうり世
まれつ時よはかふらあり世しをこうふらそふ
し詩のうをふえむしのつさ声いふよするくを
たほく方よりれしちうとそくか紙つりこはく
さうて時のくんうちふみくおてしはそく
さくうう詩み人くるまうれたうそハひそ川そてん

たくハかやうれちうなるを むしくおちくされ
くしみえく人よりう紙すくかみふそて人を志も
まえくむもよりをやりひとこうりしし下紙
すゝれしほうをみれはく物まされをいひまさ
うつたいやしちほきのさめうちきはくさう
むをめそせまりわれ手をうせはむりしろいまし
手しいす別てよ志ろねの比く志えれ京ハふもの
まかえしたすかくほくてせ紙をそめて菊乃
さくうつをせくいたせ紙をはくれさうそくし
てあひまつりもれいて紙ふそ紙れとうてれり
ちうせ紙をむすちうれりつくせうりなゆひまう

とらへてやおもはむとしかりひまなうこそいとしうつ
らきれもとおもり。さうえいの人陶淵とこ二かくらふくら
ふし。まなよりくしうち紀度上ゆうされく流り。
内記紀種さしてうれつとせりしうきなる代さ
時よはくつ。せめぢやまおもふりこ紀柚かし給紀
んくむこにとりまふとどまてれうれとほとうりおせ
まれる時よハかるふらてありけるもこまるはかららてよ
くし許のかとふかむしてのつさきいかによまろくを
たほく家よまれしちらとそえてやなくりまりてく
さらて時のくんうちかふみてさきしくはなそ
さくかう許み人てくらもまれたくそハひと川とてん

たうへハかりやうれちかうなるを。むかしあかうくされり
くしみえし人よりも緑すくみふそて人と志をも
まえぐもしうとせりひてこうりしくし紀
あまれと。ほともをれはとおもひされをいひまさ
くうおいてしうらはきのさとめてちかさにうてうとうり
むそめたせようし。かれ会とうせはむりしるいはし
会らいよおもしてま太くねの法く書文れ本東ハふものて
まふ御志まふ屋て律くて世給そてめて菊乃
法くおつを世く能こ世給。法もくれはうそくし
てあひまつり。もれいえ給しふて給れとしてたれり
ちくしき給すむうちされりつてもとうりなをひまう

ちうくたいえはなうしれとふは色うはくみとそく
心みしはよたまひぬるえ侮とひふ花のきまき衣
むらは大内紀もいひしれきはくのおゐふかく
せゐえしうふいくくちてちよくいまのちきらとも
るれおほ紙これとつしてむしとちふてぞやわとこ
みようくちぞくしそてまつる
りの也ふはむみふみもぬ摂おもしえ彩なるきぞ
のといふさおもらかましうくれ前のむけ思はやれと
うれしくされよみつるひみさこ母家なら御様せさ
彩なく御かつきあえ給へとりふ文おとこゑみさら
よう御の抱人なるむれ文むわかれ里まうりともかゝなん

ささしむとてひかうつえ給ふけ給つるあられこ
と人まかなよみそとのまへいとほしやれいさいと
まのうちにゆるぬさおんさいにかりともそこ板家
書しふそうみ給りくかくしとはつきまつるふみ
もいとらくおくしそてまつりてんこやほこ君に
のうこにかくのまへんとそひとむさつよならぬへきれ
冬との給て文めとふみわくみやよふそてまつります
とほやしけりてもそて給へ赤てそれわかりもなく
まむとよそくほうてむれわうをふさんよ出されひ
うけしるおをすまそゐめてふそてまつり給
はさきみれとちわかみのくれしき君いかそり

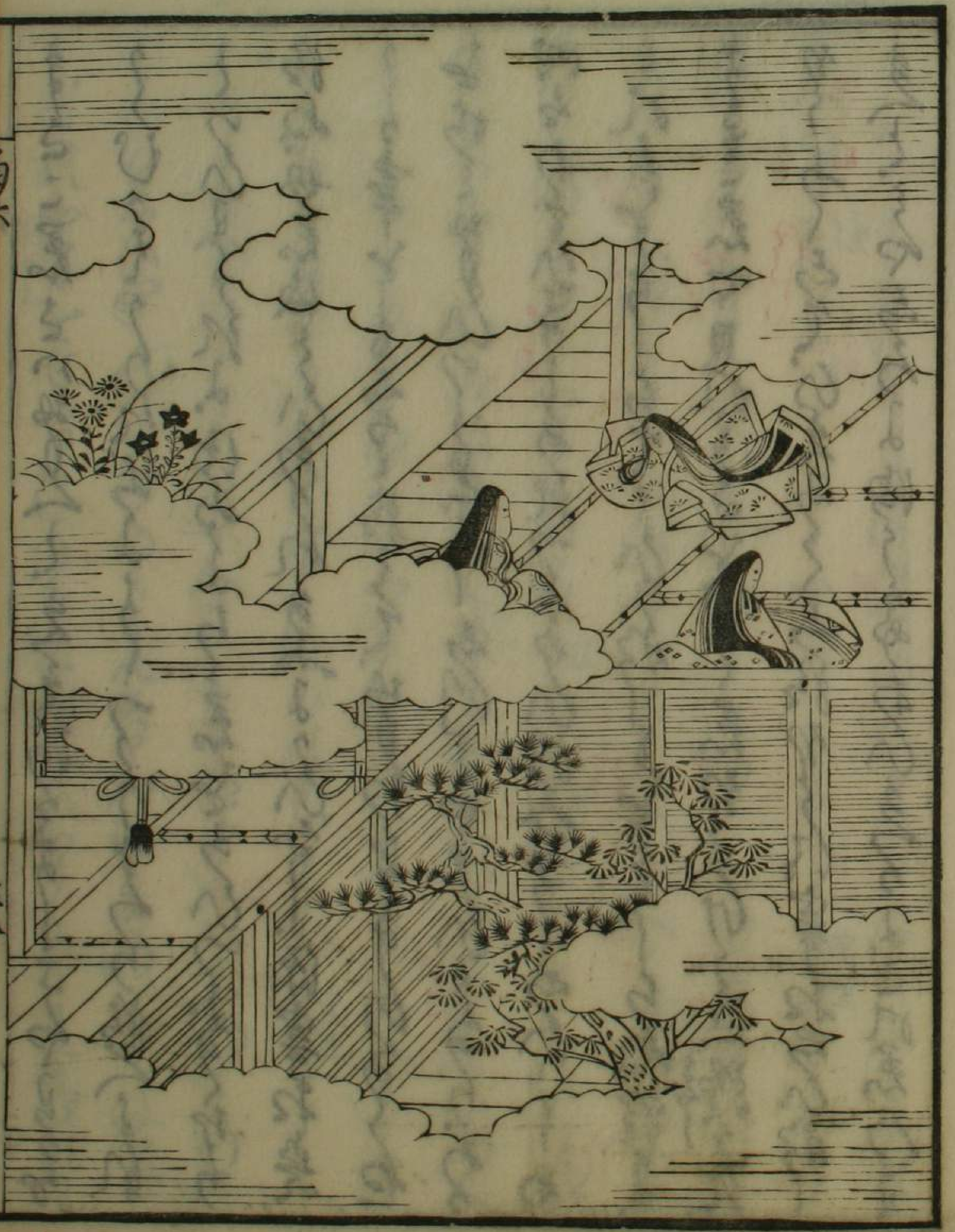
らくらとおもしろくきこえつくり、すゑなとしけれは、いとゝ
めてたくて源宰相は三条わたりにひろくきれ
いなるところに、すみ給へる人は河のほとりにすみわたりつ
ゝ給ひ、はいきゝ川のしもそめ十四にさへりてむことりて
まうけし人のねくいえしことなりふかくおもしれたり
みちいきたちゆくさき人につきまゐらせくものそはれとなうかう
ともきこえさせても、ものゝおもひをつくしてすみける
うり給ひ、小野の人もこと二人女二人女子はそくさみ
ひとりはおとこ宮にさふらふそみをつくしてき
えてかくはしたなくおもはれそ給ひぬれて
まいりしゆゑのにいとゝくあしきことゝもの

ゆわ度よりことしものゝ人に越えたるこゝろして色好みは
このおとゝのおほみやのほとりに、つきつくるとしころ
のちはいくよもなかれ、ありしことの人にとも思ひ
てこの殿にうつりみくふく風とけふつきてもさふ
らひ給ひて年月よたちぬ、小宮たちけさかなゝ
ゆかりし、さてよつらよなりぬ、殿はいかなら
あく淡路人にくるふなりぬ、めてにみくさわたり、
殿は宮よりけりれて池花の色もいよいよめつらえ
をあくいつしかやうつま給とかくくしくは
うちのみやまゝよりもとのこし侍るに淡路とおもし
てみのわたくし給はむよ、妻のあかつきくしなう日ゝおもま

こゝろにてはかくてこそうち、父君とこいにくらな
れく君まつりとくゝろにくしくかりしとおも
わんくらくのをとよこころみとおくはあよめれいち
とくせゝるくらくれくあそやうつを給、源宰相よ
貴宮よとりきれのゝりゝられいめつくこと
りおみそりそれりにおりられよおもくめやといみく
おしうおんぶさくも侍さこのゝ代とゝしれ侍め
おしくたゝくれくをまつり、宰相きよつくよおもら
こてもわくして
とこれ君て侍と給をおもひくいをのおくもを
よるりのゝらおそれとくいおかりしれきよつをとも

めゝしうむ、まさこはみすしら世を何かやとのゝ侍
へとあり、ここれくこみ給て、あることをおもして侍給
なくま侍さこ君、十三歳そて君十四歳なり、まさ
こ君にすく侍るすひ給しのこ事しくおそひもを
そ、りのをもらそて出ふ給よて君にいきれをおもかり侍
よいおそひしみくこ何くらしそこう給ふふらし
こ梅よりそ出給しらう年は人をまて侍あり給ふと、
そふくひ給をぬい御こともおもかさぬすり、おもやなさ
人いなとそれぐくぐくれくつきゝうりたらも
しなくしくこそあるれ、まれにそこゝ人こ人な
られ年ておもかりくたく、侍ておはしそてたてよゆり

まかりぬ。かくてこの君めのとよりふかくわかれこそて
こゝろにふかくおもひし給ふよ。えあるまじくおもほされ
人よりはかうつくしとおもひ侍る物をと、かくいふめの
とあるみ給くしや。わか君のわれとらのの御人もゆまはつくお
おんとくもおほくなり給つまてこゝむられおりしもせ
そこは行(ゆく)さきれをとのへこそてらられ人さふ
へかりしまされは、屋しらそしめくなふとゝのえ
てうつくしかりつむとそそはやさゐ。つくあわし
ふ父君ふかくさそてかなりて。身をもつらくみれ
さんとはおほされとふかくいふ



まことに君たちハ世の人とハえそいひかましきやうかな
うむまれ給へるハよくつかうまつり給へ。これ
とつひたまふよ。けふよりハ君をもひつ。すくなり
給ひぬ。母君海よりあかれまふよりかなし。源宰相ハ
かゝる事をも見え給ひて。世ハわかるものなく也
よはひもつきぬ。かしこやまひうつり。ある
時にあそひたまへれつたひひとみえいひしぬ。
これよりそしらそてひかしきによりかぬ程よ。
まことに君七日れなさをよそ君わけるさ給ひぬ。
わうつてひとふくよ給ひて。宰相の君ひはし
えんとこやよろよ海うるあひるよこれ君乃上

右ハ左ノ誤ニテ左大将ニヤサラ
ハ中将ハ助ノ誤ニテ左エノカミヘモ
ロヌミナルヘシ
ラモノカミ未詳

さるうちにかむさよれハおやのなくなりたるのちより。
一人あるおのこいみしうこゝろをとゝめてこふ
住くまり。ひと山の人のかたちをなしたる源宰相
をあらそひ給ひてまうてきたるひとへとかくいひかし
あつくたちまちにぬらしぬきさく乃むこれ君の
をとハ春の給ひもやくてかしこにあらしてつく
となりぬる日給ひての中わむりしまいてうらなう
山ふあるかりまうさせらハめれ君をとるみれかくて
しまへむの人のこゝえ給ひ中おほきなるもの
小君ひとへのかむゝの乃ふとこゝえむ乃おも君を
ところの中方をせらハたうえ給ふ。ちかくてさへ給へ

まさこ君は、おり人と、えそひたてまつらで
うちむへやりけれは、よろしくつゝまれ給へれ
とゝひまうきよ。はゝ君よろしくあさゆふなくひ
給ぬ。母君海よりひとつれゝふよりひかし。源宰相忠こそ、
ら事をも志らで給へて、ちゝをかへすの方も、
おもふにちつゝまで、志川にやまをひかすら、ある
時なあさひらかれつゝ世をひとみえてたゆひしぬ。
これなきよしらそくひ給しよしらぬ程よ。
まさこ君七日のはてよりくる君おほけ衣給ひ
かうちふして、ひゑふとく志給ひて、宰相おはひ給し
まゝとゝりやうろよ海ちかふあひまうよに君の王

さすかにかむさよは、おやのなくなりたるよりも
一人あるおのこのうつくしみことを、おもひて
ほくまり。ひえ山の人なきとめて源宰相は
ありそて、なきまさりひたやすらひまえと、かやうにかへし
かりの志めにやうし給さくるむしやうさこれ君なく
きをいたり給きうくて所をとなれさこれまゐりて
となかなりら給ての少将むりしまゐりてうら
よいあるかりまゐりて母はゝめの君をとらへそ
おかしてえけりの人ならへ給中志たなとの
中将の君ひやうんかむのさらん出らむむまの毎をかね君も
と、これ少将をせらにことえ給事、ちくてもん給す

くらゐありし。よ川こ君のこひしく思ひて給はらく
なむ
うへたのみもゆかしきことおもしとおもひてもゆるさぬ
とみゝかならずねたくこゝに
おほしいでゝあそびし物をかへらぬなか
の池よりかへりゆくおほ。おほそれあらいかにゆきは母君
れとへしとも　かゝる檜皮　いはぬ川の
はかなきことを　むすひはく　たしかなる
ぬるひかて　うきよりも　もろともに
かゝるもせぬも　をとられしと　数つらし物を
此河のまゝ　花乃なく　されまとふ

ろなる中に　うつりおもく　わたしみゝきを
なかゆけれ　わく涙河し紙　ぬかる心じく
ねるしのよせ　よそに出て　咲もやすると
まちわびし　常ゆかしそれ　とふかる恋
くれやこゝちと　出るのこれく　よ河のうへきけさ
たくやさしれ　わくかねと　せすいはく
月日のゆくも　たえまれに　かさうれ出ひ
るそしこと　くろわきまて　うれなそて
いつしかるの　うきそれこさ　さらすきにも
みむるのみ　さひしかしふ　しらさくく
ゆやすしひて　すきため　うつくれなねの

うらをそく　きかういつよ　たりたちて
つきこゑさと　うちむさ　くれさかけに
はきにけさ　しろくさに　むしぬ海れ
しろもれさよ　かくわくり　ものくめとに
わきとおて　ちれのことに　おそひうし
わかとれひらり　松くみちり　えさかう雪の
さゆうかかと　おくまんとやへ　かすかえし
やよのつきまいへ　あき海うり　これをいうく
ありめれと　たまれさにも　あわしうは
てふ鳥さそ　くもひあし　そら雲乃
ふきみてを　あらやとで　あらくさ

うきのかすとと　みくゆのしや　なくらもと
ありふりえ　たうめてくるに　ちられ目乃
ひくらしすそよ　くりらの　にをすに
わくらもとのそ
こそにあけにこわろ給くてや　しひれ十のしいそうり
ふそしめ乃前かくそくれて、大将殿は上人のちう
つしたにふかくかくいて、百五十騎ものとのうす
すくかくしを

のてうしにはうひをくゝえはしもなくもめうとし
れゐしてくふゝゐたまふれこ中人かうゝらとうり
四人ハうちそくひとうちとしのへてなほく乃
きもつきやうしも弁川つゐのはうそくとも
してことくやまとうとしゆるに一の御子のおとゝ大との女御あて
こやこうりのはの宮の小方の御おとゝころ三人
ハ御方くかう一所なうしもそてゆまうり給御子ゐ一ゐ
ゆくれ十二人よりえ四人下つ人四人ふんとれさと
えゝとれ、こゝそく御子ゐこれかうゆりくこ一よハ御
むてる所まてまうそとちくれとやとの人あるハ
御みゐはまうふくひハはうハこふゐともよの宮ゝうくちう

給ふうりやれはまいそうまてゆかしこや
なかしねとくおけれあつとハられねあそてみと
そのいとをしれうあおやき、女御ことも
ゆそうしゆうやうれかえてこにかうされとしろ
くさくともやりとつられ、わくゑ
ゑ人てひとしくられとあなやきのいとふう
くもこゆるみとりうなるとひめくなりはしいとり給そ
なのまてらは、ときアマのゑやれのきこ
みかせあうや川の坊あなふりやなうすく
あて宮人の木なひ、中つきさ乃みや共れてこゝくハ
きのなくとこてて

玄宮御考ラタソ
ナカスツノ国東戚ロ川辺カ

正頼女。中君

のてうしにはかひとく。さくもかくもめうを
れたまふ。よのこよひれに舞人からうらより
四人。さうそく。ひころとくの人てくめく乃
あをいろやうとも細川つはかねのはうそくとも
してくかへりたるに。一の御かたの大殿女御あて
きやこうひのあこ。右の小方れは蜂しきとくら三人
は。御方くまあふつきてさうしら。御まへの一の
かくれ十二人よして四人下つかへ四人あつへてれきと
えうくれ。さうそくはるゑくしれかみ。一よは御
むてきくあきて。まつこくれそれやとの人おりは
れあるなようふうひ。はるかにともよのうとくまう

ゆふううやれきまいつまて。おなりてや
あかし。れそくあけれあるとひられぬきそてみと
よのいろをしれつあおやさ。女御らと
ふたしかなりやうれかそへにおつされとしろ
くろくもやいへつられ。あかくも
あか人てひとしくあれとおいや
くもよあみよりかみてはいろくなく。いもう給へ
はなのそてはみ、あかあのかやれれさ
みえせおかに川のおちゐるるふゆりやうすく
あなたのせえ。中つかさの乃宮やぞれてこういひ
そのうつくしきて

わしむかうきみたちのうへかりハなよふとか
きくそうくひとそれにし右大将殿(正頼)のはかまき
喜を打しむくひとの御をしうくるる晩八(アナタノ北ノ方五郎六郎十一郎ナドノ母ナルベシ)
み花そさるるるしさむ婦さやうの殿(正頼ノ聟五君ノ夫)
しらむまてあるすのさ御よ原うりしてえ
なのかうりやひさしさてさむ。さ河みくさえめん乃(御津)
むのよの(正頼ノ聟八君夫)
ゑみ川るなきこ志て雲のしそなりしさ川や
たのまむこのちるをさ。さいさう殿(頭)(藤 非之)(宰相)(正頼ノ聟三君夫)
とくにのさてつろ物忘さ河乃もまみるれそ
のこもなりかやうれ。中将殿(源実頼)(正頼ノ聟四君夫)

しくとすなりかみえさ川のさ殿み
つく八もうけしかなやとりきむ。ゆくそのにしまいに御
らくへ喜須いあるよ喜文からさうにさてかり
らうくと将くかへこにちらふりすなまれも
さはされまつりせし。みくさやらちうてよいまそ。
らうさ母わくさしたちと祝とく
みそとさよハちけさの花をしちとめて世通へ
雲なちふかせのさむさわとて女のたうそくし給
まくらは役さやくのわりてやうりぬかしとあふえ
はゆく給わくれ。兵部卿陰陽道南海道のむしろや
もつかいて。おつまれつさ事よ。あらててくはりしろ

以中納言ノ実頼ニヤ

うちかけられのみやしろのかみにたてまつる。
かみしもいそぎ、かうかうくれてしこそ
うちふくうしてよと川の御まへけいしてかち
きみの夜は、たゞ又もこゝに流し給へ、よと川の
らはかれたるよすの絵しるふさわたせるほそ舟こ
しほはまひらりてゆかしけれ。海人さいはくの
佐よ御まへにしてまちうけそれうつくしてれ家と
もとのはしせく御舟つくりにたりとして、みちとひは
くなすたうたひ、祝詞のたちくものゝより
うたてあさこうたのうた夜よこゝ又のにほひ
しろけぞのせうら人つきさらへかくれ香りくゆらく

くもかくうてたてまつる
月の輪れりけるやうにけいてしむかひを
らなる雲のうちにかしこくえたち、おもくえ
雲よりたにかはる、はゆかつ見まよふゆる夜を
はしたなくみむとて、かくいてはれてある中納言
しる夜ふけてうたてらえたり
実頼
あやにせしのうとくされ夜にもあはれみなんあわれ
みのさらによれやされふみにうえなきおほかるものを
いかで人をれおさえてく、中納言れえるにしてくゝ実
せ給ふ。
そも世にしてまいらへたる人をとめてて舟とも

うちわたしそれのとやしろくのゆゑにしくらくを。
ゆかしきいそぎ、ゆかしきいそおほかりしかしこそ
ところかくうしてしも川の御をけしてゆかし
きつる夜よ、御ゆかしもことさらに絵をくしも川に
ろくれることのもの絵しもかきわたせたく絵こ
しもなりひろうてゆかしけれは、海人さいさくの
はよ御なやかにしてまつりさいらくてれなと
もむなしせく御舟こくれとまて、ゆくさいよ
れいらくすれともに、おほぬのれいらくのものより
うせしてまさ、このかの夜よこゝのにおめう
しもけるくのせさらへつきさらへいされいとくゆく

いとかくこえてたくまつり
月の輪はけなやうにほつていかを色
らすき雲の上のうちおしこえたる、あやしう
雲よりたに見てはゆか見よさふら夜を
はいしそうつしみむとそ人しける年中納言
しき夜なく、たしてくらうえ二ら
あひせしつるきれ夜もみれなくいゆかしす
みのたくにとなやされおとされてきうるものを
いそも人をれあきとかく。中納言はらんしてかくなる
せ給。
又世はしてされいる人をもとのうちふ舟とをも

ぬるみなせやみつゝすゞとてこれてくつかはし川。
みえれへしたくゆうらち・みえうしにあむさいに
まうめと御らくのせうよおゝく・小物まし
えおもし給とも人きひさうしく給やこく
瀬てうゆ川のふちさ浅すゝへるよなてとみ
そゝくすうされわくこゝや
うとはうのをそ紀するらへいさのゝ人よきあれるま
川の中よ浦きしくへ・源宰相りくのさゝふとそめく
いくせしるそ・
きぬよしの中川のゆうとなのむされすふ天のみ
そ紀給やうく給む・とくのそゝ

非波めときれさうたるこそさみはめくらむ
なとゝのいろくされまむ・なとりに・いひらとく浪
おりしらひ・浦まし川ゝまうふ・中わむ泳そひさうり
うゝいろくれされちうしきこう・これ去衣のみろ
とこ給ておゝしれ中く
いろくれされこゝきゆ中せまちうーけうこゝえ
いくしわうちてそよしそ・翠アはのみそ
らう花ととくめらさひつく泳よいそくれしむ
こ給さへこそやみうらん・みうつさされみそ
と海姫うこゝれのいろくちとめれとねこり
わう中もとゝろそあやしさ・衣の中く

サイ相モスサイ相ナルヘシ
又術ニモアラン

さくらまつもまてともみえと見ゆるとふき
み風のかうりと思人ハ武アてみて
みやこいてゝやるれも花とこゝろをみ き
とやる紙人のこゝろ世さ思りんのこゝ
むまてとめまふ紙すさめはさらしそれ
さ人浪のまハかうろ・とうさへこゝ中川くる
にうしなのこ川と
ゆうみとうみちひろきそ山うられゆ川いつれの
ちかよるかさるん・さいれするにさりへくむくる
こうのこ川り
き海ちうともとつゝみてきちめたりる

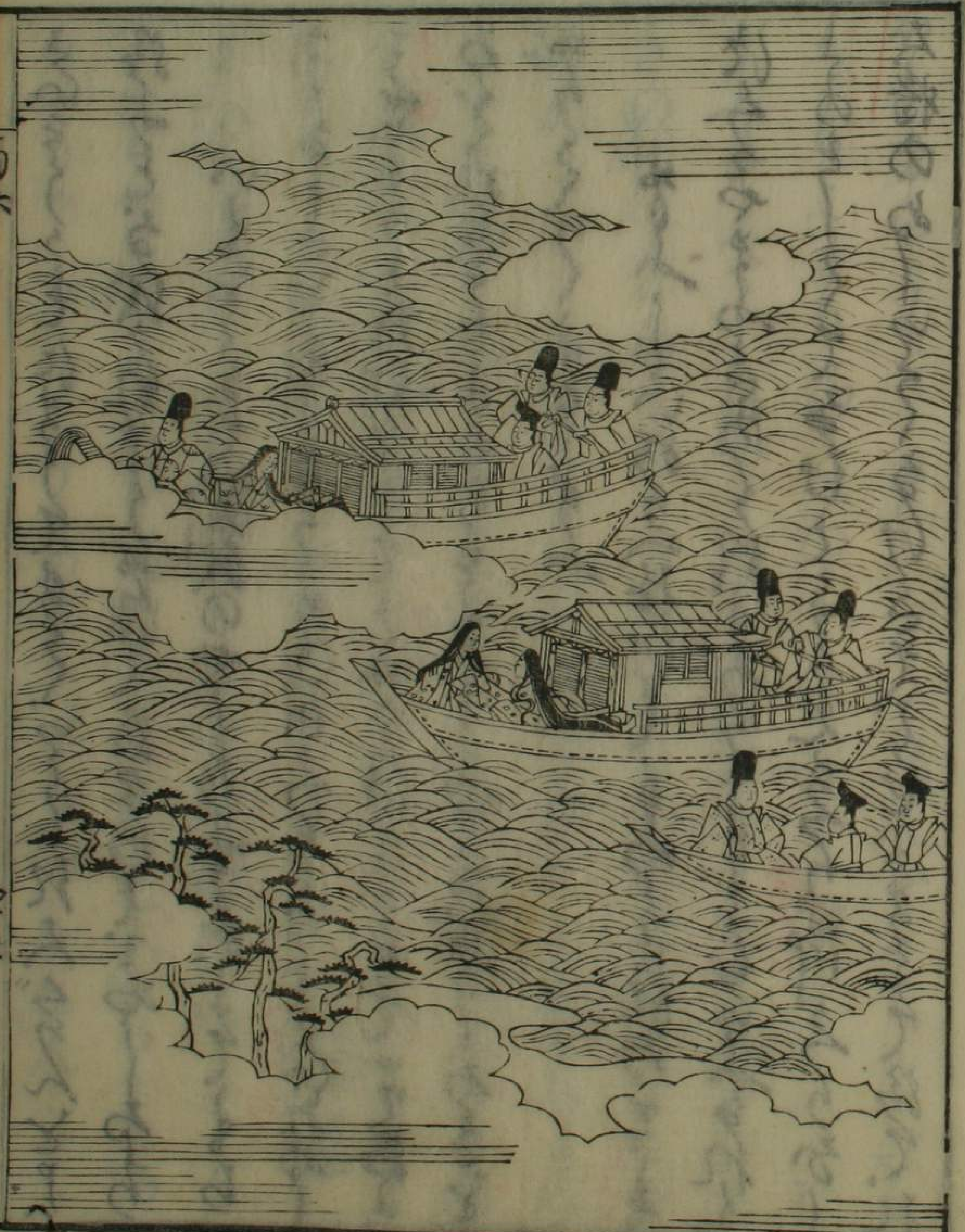
涼中将ハ涼カ

く浪かゝくゑるすか・きかん中将くろうとの
ふきあけをこかへしかよみ給て
くうとをきこさく雲ふとふかをけさそ
ちかのみちうゝれみまひて御まちきー
さふらふくのつきとも小女わよそひさくハさ
らいうのはそなうゝ海れと・ら海ちせく・地を
しろき前くぶこぬ前すくみくうち給ぬうくて
文きぶうたゑばいはこれけゑとひこうかいさく御
はりあくなむみをゆうれとそ方も
ち川すてたひてもあうれをよしのこと
しう世とれ七よ御うしごとさらえまつ・おそみや

サイ相モスサイ相ナルヘシ
又衍ニモアラン

さらぬまでもとてもみをえらうとこさ
かし風のかうりとおもへいたみてこのみを
みやこいでてやすれもえとこうせうをかとき
とやうる人のころせらとふりんのつき
むまてとぬきふ我らもなはさうてえれらく
さ浪の女まいなくらいとうてこをうれこく
れらしたのこ川をと
かよらみちひとそむらう川いつれの
きやよ母さらんされるとにさありへくむとう
ころのこ川り
さ海ららともをつくみて来らぬ我りる

く浪れうくえるりもり、さん中将くろうり乃
とふけとこ川しかよみ給て
くろとをまくてちく雲ふとふらをけさこそ
さかろみちうこれみをぶきといひて御まくもー
さおらふくのつさともふ女れよそひざくいさ
らううのけそなうら海れと海をせく地を
しろき雨くぶこぬ雨すくみくろら給ぬうくて
文表文よるをぱい浪られけるとひころいとく於か
ほうれくるむみすかゆうれとそなき
かく川すてれひすもおうれとそよしのこと
しうせこそれを子地うしとらえまつりおてみや



浪にあまの川をへだてゝ縁のこのみ里也そのゝ
こゝろえてこそきけるとうちえ給ひん

源

こいさうらもにまうでゝまうく、いふこれんぐゎんと申し
給ふとおぼされしより御し給へれんにやしなひたら
いもとくさそ霊験のやしろふかき川さてもち
うらおほさをえそそこめでゝ、れくらあしとれぬし
はせよりをたけまうでゝとかの母しらむてそ給は、
わぐれたらよわかたらやまぶきれがりしろきを
地りくぐくさしまふ
ふとかふといぬかへ松けんりうたもにかそこそ
たゝらやまかさのられ、わらしりうらひさまれえ、
このをしくてあむとかえまうて御かうかし
大将のぬしいらくあけさせてかせよまうて給て、れ

ひそたかまつおかよりハ誤カ
一本よしまつおかさ…トス
ひそハ比蘇寺とらまハ高
間つぼさかハ壺坂之

かゝ事をうさうおおいけらくぐゎんをたてまつて七日
ゐらかこゝら給ふく、ひとしれおほなやうしてれ
よふ年のあし給へれそこのれ寺うたえんこもり
さの御らきあつうつきて母と月よ一とどさ
うのきあし、いのられあんたうそでゝそれんん
わしう給てゐくまてつらの母、ひぞたかまつお
れゝおさゝけおかりでゝろ、ひくまですふきうまく
にそしきみちをとかぬゝりへつれ給ひれお母を
まくへそ、御わしそれぬくてもかよれ年のさうる
つきと白ほそうゆかりはくまく給ひひらうさ給
めしうきりかうめさて、ゆらうらふんとする

時に右大将のめし三条の小宮は中納言よりこそ
ほそ文よこころえさして后をれんとろるすとおもほえ
まかりさとくもしれは、ゆをとおもひは、それよりをとり
くるしくまつり。
おほとれをてみ神をとつるかへきなきみ
くせはそうりとそかうとき給へえまつり、おそくて
みまそて、御子の給ふは、中納言のこと身うそくへう
くの給へ子と、いつくひのたよまうそくむも、いと
ほしされ、いとをそて、給ふぬ御めとおもくぬと二さ
ひさうしをけすと給へしまへこれは仲忠はうそく
えまへまいりひてそそ、しいくところえつ、つるは、

いそうとありひてところえ給ふは、右大将のめし
しうくいのてことつくりそかうくらんしや給
いかさまをなしへよいはいとこと月よきこといさ
きそまうりんみとくらんしや給へ、神とかみ神
かけといふおりにけなくらんとそ清くして御
かえとうしひく、中納言のきう給三条殿へむかへ
まくまう給てものくうれとし給ひはつるよ。
あやしくとし月あるまくに、つまれさのこと御さり
まえて、おひとうしひく、神なりけふりしそされ給
やとくよ、給さ所よまてまくしうと、いつくかうん
とすんいそやうへうの事は、むよりうせてくへうの

こゝろみらるゝ物とこそ見給ひしか。この御たのみ
こそ、左大将いつゝよなうめでたき物とおもひぬれ。
中将いとあはれとおもひ給ふ。そのほどもまさられ
人々のうちえ見て給ふとこそよの給て時
とられさうしこそめでたけれとてひとつは御やまくられむ
おれし一所ふくすげすゝらもえ物なりの給ひし
はふや御こと右大将殿にさらくなるかへさふ
こそありければ、かのあはれもみるなるぬ
かくしくへ少将給へるほどまさこもおやさしと
し、おなしくはこのついてあらはれんとく
けるくとも、花のひと川こふくかしのふとも侍

大ゐもうち右ニテモ左ニテモキコユ
○大ゐもうちのトナキヲ入レハ右ヤ
ニサリナンサラハ右大臣日ノ義
トセン

かへりきつる給て人のいつらをたまへくと見給て
て、この事を見えあつらきて人給ふ見て給へ流
とうななすることそれとなんおほしてお御笛けしと
ふえかひけむ。もとのこともいつくと思ひ給ふ
中なれど、さるを、れとおもふさ給ひたなふ給ひうたき
給りさまくさもてもおもちて、いえあなたうしと
て、おほらもせられの給はなどう川からしこ
まうまてさらものりえうしたく給れぬ
いふまでは。うへとうくしおきしつつたまふ。
こゝろふかうふかく、いはれけるまゝんとれ
つゆしうくらさ、大将のあをしまうてふくして見給へり

こゝらみ給へし物とこそおもひしか。このほたのみ
こそ。かさへいとうつくしうかたちめでたき物といひめれ。
中将いかなればさ仰らん。かくの衣もゝさるわざなれ
人のよくみえぬにて仰しかど。それはよの常にて時
とれならぬこれめでたしと。ひしかはいかやうなれど
あはれにしなぐずげすなどもえ物するの給ひてみ
いふや御んなる大将殿にもあらずなれにたるかな
こそあるれ時〳〵おの御はなれにもみえたりぬ
かゝる人々の中にも給あらねまさこにもおきてな
しかるは御めの御ついてあら給へなくし
けなくともかのひとつにつくかしの物し

君はきこえ給ひし人のいのちをたすくとおもひ
て。このしもきこえさせつるさまして御ものして此花
さきなどことゞもそれとなかりそ。おほかたけいと
こそよしとけましも。きこえもいふくとおほ給ふ
おほからのぞふれどおもさ給ひたまふ。ながうたき
物りぬくてもさもきらめていえあるやうしと
て。ゑなりともせちにいの給ひなど給ふかなし
まうさてさなるもの〳〵。えいてしたゞ庭れぬ
まま給ふままは。なをとうくしあさしつるたる給ふ
ゆかしなるかふとくとのみけるまんへとれ
せ。おろかしうへき。大将のあしきこえさわし

さうぞうしきこゆるハ常ならぬよおもふことをもあ
たりくやすらかにハあまてゝみやつかへし給へる人
なりしかどものくるぬよしろとをりし御ことれ
ものしろくゆかさうはしめそのことみそなりの
しりたまひよからぬ事なりとおほしめしても斎宮は
道雅の卿これりからうてまのこゝろの人にも
のし給ふすやハふかくそこれ中宮にもりなりあれ
やうくもろくれりしなりぬつきとゝいけ給ふく
御ぞうめくくあむらやのまへし人斎宮
よれの給ひやうそてうつくしけりよなりぬ
おくゆかしくりのこゝろみをしておくえようくれ

らえまいらつる法えうまえいまは
ハの給ふ世ぬことゝ思ひつゝきれそのめ
への御心もつきまもしとりいまさまくとて
よ世のとそとく女乃しもひ御とくなりし川き
そてまうち給中將ろくのあくとくおもり事
さて給ふみてハいくしもみならえ給なり
おもりハ命あるから心ええ給ふる人よハおく
つきの物しもまたれぬ物のそや なよしくして見え
とゆめゆきとて給ひ哉ふ定雅
思ひたえなむとて たつかたいまはいやつうれ
はらひの山とあらんはかりを 権中納言定頼

二句鈔本かしらの書ハトス

まで ハ左日さここえニヤ

正明
からくしくけふの海や神のしるしに塩のみちくる
なしみとなるらん御前なりける三のみこ日月から
わらく申しまつる
せかうし川しれ雪ハ我川よりいつくふ重鬼
とし蔵人のまさこれをつふ以後しとめこそいれ
こしうつくまれおとうこし給ふ源中納言のこみまいりち
うれ給ふいこさくぬ雨すく こしの君 山さくまね
かたみちりしらぬ山よりもひまれえみちらふる
くさこ西
仲忠
みすくこむる神のやかなとたしらるまきこそ
ら以もおふこあられとうさくまへ里に川くるなし

源中納言ハ涼ニヤ

源少将ハ仲頼カ

去正分 タリ

ぜん中ね よりゐてきせく ひさしうありけれとはかい
はらるうれしとおもひ海さまてそいてこうとひまを
れなくやゆへす思ひかえぬ人かとこそおもいさし
く御ことゝも給ふれとて
これをくれとつらつれなしつくれいちを
よのまむ神とあるく 御くらなし 蔵人の源少
将うれしひよさまくるにきれあるを
いかゝしめさまくゆられあふまゆるといふ
仲純
へもの緒ゆらむ 以くらなし もてうれしさと
あひみのくたとりて出つる海らハ身をとうさ
かなれこうきまれくれ なかるすけ

二句併本かしらの書ハトス

まで、ハ左日きこえニヤ

正明

うら〱とかゝる浦や神のよゝり塩のみちくる
なかみとおもふらん御くらまし三のみこ宮月かう
ふかく咲てしまつる
まちろしは川しれ雪ハ吉野川よりといふくふ里哉
よしまろ人のすきこれをとふはお見し上ぬこそわれ
うしうつきれなと、ふかし給、源中将のふとみおりち
られ給ふハうきぬあすく、こしのちゝ山ふかくまゐ
かた、みちりしらぬ山よりひとつれたまひ、みちとうちふ
くさこ西

仲忠

あすくむむる袮りやかなとおもふうすみるまをる
らむをおまへるあるれとかくてしおへまで、おとうりなし。

源中将ハ涼ニヤ

ぜん中将よ咲せくくひきしつかもれどかくかく
ほうおりたをかり海さまでそ、いさしうえひりを
れ、なくやゆハ寸点出りえぬ人ゆかとそおいそし
く御しらし給ハれとて
よれなくれとうろしつんなりちを
よの吉む袖とゝあるく御くらまし、蔵人の源が
侍られ此ひ君よ出らくるにそれぬと
いふし水うきまくゆられ歩ふよ給るといふ

仲純

へるたつ神とうちむ、此くりなし、あくら山
あひまのこたへりて出つ源のハ名をうすき
みなれこう出まれく、れたからり恋乃すけ

山と山とるなかしといへる海ちかき
さゝ浪やとおもへるかな。まくとらえハ乃大内記（だいないき）
陶英
よし川萩（はぎ）にわく家（やど）らもちられさハ思ふよらく
思ひのゝかならけるを。たくこそのかさり
世の中をとりめくらめしあまれともらひてふ
山深まくこそふきぬき遠くもれくちなしくて
善言なり
しらみつしむかしくまのもとまへやふかさ
らとさくせことするへきはやくさや
よし川ますくせんとしあくるものこへ風定
のちしかゝふかくハせん。又言なり

我らくんのちりハ雲とれ里ゆかつ漱をこき
とやまうれ。わりくとくも心ハせ絶地をれ。よのまあ
しみ色なりあへしやとらくしそまうれまめ河
てこや
〽八雲の外とつくなれともの人よいはれ家
ちりゝ山とつきりし。言なり
なれなきハ山よいるゝもいつらなんとみを
よし川すそ地ハきしめくさ。歌書ゝちなるゝ人ゝ
あるく文
山よりいてゝりゝ紀ハ八世たみあやうぬめ
のこれ遠くされけり。なとゝして絶。源宰相中将家

我一本ニヨミトスル非ナラン
洋本同

正曰ざいたノ誤ニヤ
正曰こそハよそナルヘシ

しもりゐて。山たかやしにゐよりつまきく山くく
ふたんの法ゐまはせられさせつゝ。ここし給へと。
ほくりあしとおきくこともりすて。さいひてわ
らむやへとて。かくこえ給
実忠
わきおけくいとより山のへのおもひを
別かさいみちもれさうかれくらかし文字ね
同
おもとのとてやまは君いる我人をとう
みそいしとあらなん。比をおもし。かひまさひとや。
若宮君をつかるよむくの給ふあさうのは若
そうられはもれさ。御まうりいろうとうりそ若宮
くりをいゑうけ。よみぬくく。いさいゐ母主みをはく

のゆゑをこそ給ふを。いざやうふかりわしころ中
そや。ひをさこめられぬことはりなれ。そおもはむ。
そやいろさまにあまへきはらたをけなふ中すけなへ。
くそれつまにとうふかしめるあらもる物を。
ましてまうり給ひれは。やうくえれえそめへし。
いうくはらしぬさうなれにそおもしとも。給ひしとこそ
えさせんやとくとしはなありぬれえ。わりおもう
ともくもはつぬを。これようえてまへ。若君わ
おほそうはとくもさる御まへさおほりいるけまーと。
正頼
このわいさおもしてはしくあそしまうにうるさや
ふそてこおこよおぼそとのこりれえ。ひやうぶ卿れとも

ちかくはえさふらはしや。むかしく宰相はうらみきこえ
たまやなかりしを御覧ね。源宰相おはしけるをとこ
くはえしさるすいは志給ふはまゐのかたにかたはまし給ふ
こゝろつき、宰相はあまたおはしてこなたにもとより
ろかは給へらあつくてもよろこひむとそあなる。
きこえてし給ふのこなんおもふ。まゐりてさくるなる
こゝろしもなくも、さこの程ゆかしとこそおもふめ。なかれ
しくえこゝろし、夜もそとのみものしきこ人よなを
わされ給ひんといのちにまそよいあらし。つきらかな
まゐりまつり給ふこそわかめ。後にまうしそいえさふ
らひ給へさしめ。それは給ふなほしう。まう給へ侍らし

むたろりまへなかりけふくはいかくきこえし
給ひちよ。世のかゝるならすれそやしれけまへ
とちのあさことをれうしてのあまへは、ひやうなき
まれきこしにあむ給ひ、としころくのこゝろこそ
給ふ、さまもありめつきこれまこされみえはかなれ
あはれにあまりともなり思給しうちに、思ふらくへ
くも何しは、いてかそろしけまゐは、まくらの給
こしこひま給えへ。まうくなみとしてさせむ
宰相まうつらひて、これ梅こそ給。またはこそてさせ
しとなりひまふれとかへもなしとろふなからみよ
まかりひなりいあまりめると。後かうくこなまれた

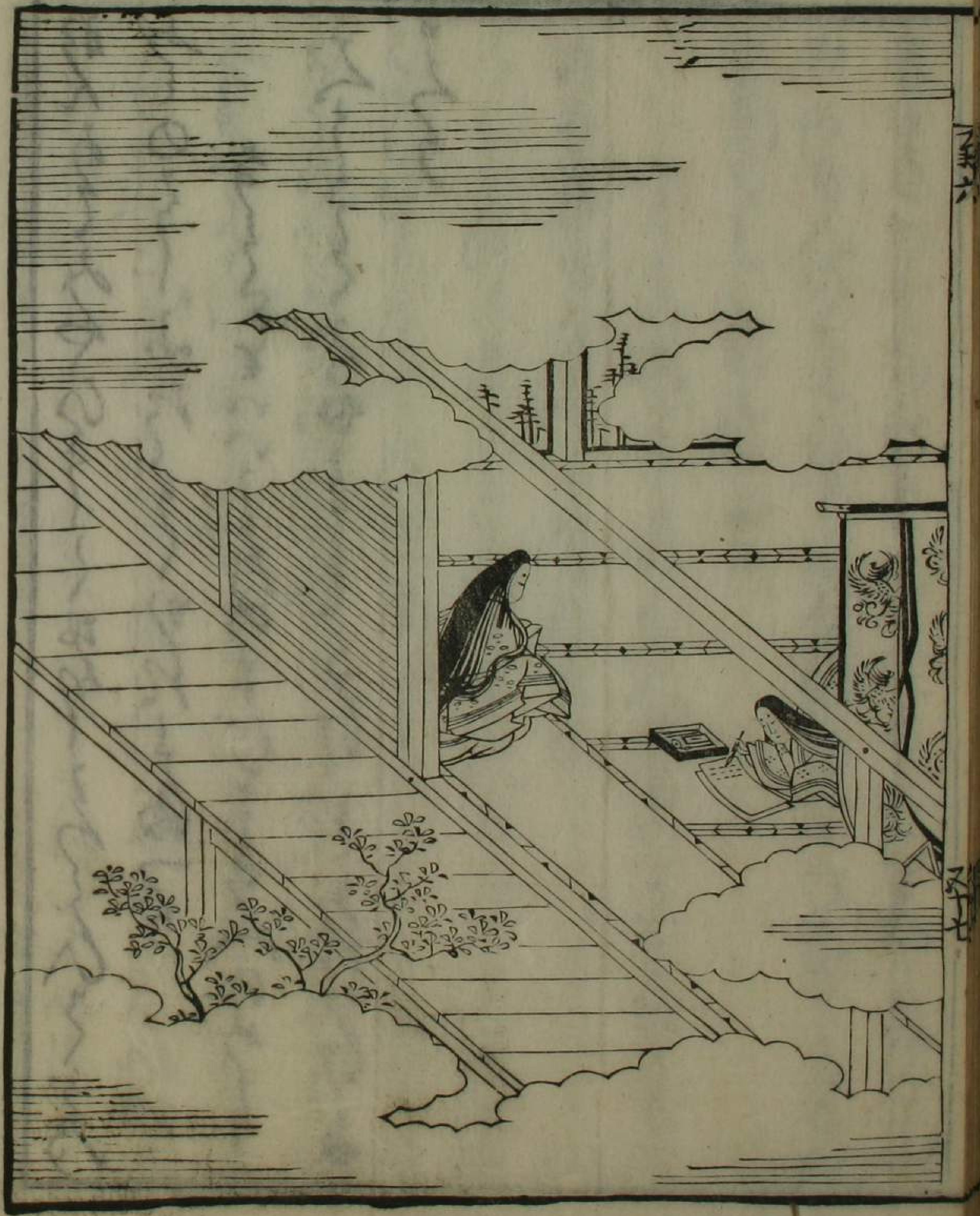
なまめかしういとしきおほみ給へ。おほかりぬるよしの
きぬたりのみもあれと物すひ給れと。かれけりく
みなかいみちたる人ならぬんとうとて
宰相のきみくつくて、なにきこえたる山せ給しとや
おほんみかうまれむ物を。いつく葵の人にはとかくな
世にしらぬえきせさく。やとめつりのまもかれ。おりきき
しやいかにふせむとえく。蒔絵のそこにまゐれ尚侍
うちれたことしよろひよ。おやとぬたくて筆
のさうそく、おやうちのみえくいまそかくいひやると
らせ給
宰相ししさりぬかひいてあくきこえをおかりこめくなこ

かも給おかりとれみそ。とそこせさふ。蒔絵とろ
をとこて。おほのかりて。おそくやふこれにふ
みたとくゆかう。み給てものこの給つとも。おほう
思いとしくゆきとひつて参給かると。こうしえう
ことなとこうりきこえ給ん。むかひおもくゆすひ
ゆは。宰相ろうしくもそことさこあれと。こういれ給
きれ。源宰相おほしはしめをとこうえく。おりひ
なけくとしと給りあて。宰相は思のこゝを
すいかくくきこしゆふ
宰相にことかりふへ乃むゆのかりかう
あすこうれきこれとまくられ。いかにこうこえたへ

まうしこそあけましとて、若紫の君よりかくれけ
れりちんのとこうとろひよこゝゝひとえとて
いはくとしを給とて
としとゝゝのむ人主にてまたはなまとこ
のあいゝもなすみくろきん。若紫
人しまうこゝゝえられもありもしけれ
えもおしてふといとそをり人とそし給ひて
まつのかりておくこやよこれはみてあるく中河
みとておほみのとひそろ。ひとくりとてえ
とせ給へ。こひさんの給ひえんやうく京の
とゝもひとなまするをみ給まは。りくれゝ

れんおとみやひとしく思ひまうしひとくなる
みとのこゝしふれるかれし給へり
親王をいうしたのまむすめ人のおり
さくらとく思ひとそそらけ。とられつけめ
まつり

宰相まうて給ひてかへりたまひし、さらにくるて
さまそ給ふ
かく数人まうけたる人のうへまかせて、まさに
うちあやふめかるかとらむ。しうしもれんかかり
くくそてまゐり給ふこそいとうらやましの給ふはされ
え。みまくほしうて、めかるにまかせてまいりてほら
むせぶ事つね。いまはなくさむるかたもなしうけてを
みるのみ世のまちよ。めかしうさるあなたにかゝるめをと。
いきたよいくらう御心のうちも、わりなくしくいとあはれ
みるもあはれなりとて、とめりとても。きの
りいのられてふんまくらまくの外へうよたへ



源中将ハ涼ニヤ

ゆくまでなし給ひてまゐりて、われかくてひまなく
くおほしけれは、よひよりいらせ給ひてまかり給へ
くるあしたは、こゝそまかれ。いとこしくいとひとせり
あれと、たえてもまつらぬものとかくすむ。中く
ようつかしう給ふふけしき、夜つりもしめやかん。
宰相はよつなく、これもとれ、てさしもの
まうてきて、わかくもゝわかくなりて、なにつき
のことふ、兵部卿のことをしそれしてのわり給ふ
このに源中将兵部卿なとまうてて、たゝんと
てまへとなふらもしらせ給はねは、てくらし
て、いとつゝして、いとのうへにはりのひみそれ中もしも

これくらきよ給ひあひたゝれはいのよとのたまふ
こゝのみやをとられく、兵部卿のこゝいふかく
いひく夜りのふ
ともかきをおほしめしてそ君わやれらくの
このはいのちはかなくとも、兵部卿のまつりしに給
みく、おもわれるれもしゆりひて、いくひとくれ
雲井はよそのこるいのかれもてひとへ
をはのをとゝりて、にてなんなめやらふいとて
みをいとしてくるむとくくしつ、源宰相これ
のうちなまてけりいりて、おくらさきなとしと、
これのよくまいりて、よつきやかぬことのせ給二十日

やうつたなきみのほうれのつみよりてゝ七大寺よ
まうてしはんへりしけるひえいからとふ
は。かのゝましきことのはなたり。天地の神仏
まうし給へし源実忠かたちをくやしきにより
ん。かえりのかりて。おほかるかなにけむりし給
ほ。罪の深りより。おもうり罪の人ととらて。お
さうかゝりくんそこ人へして。罪の壇よ
歴天く伝ゑせくやり給ふろりこそぬとけ
これはせ川とおそれのせし川。長中そくに
七日七夜。世のつもりかしてめぐみをうけてこれ
申給しまへしにたゝるひ給。伝ふくれおもさ

みのかくこみえし給へくはなれハいてゝまかり
りまて。わかはゆゑありとて給ふそれハいさそひ
まもしらむところはなれむとして志賀の山
りにみそおもひけれへのみちよりまてにけふかう
まうての山になくられもとめしみちに
つかくの人ともなく人ならくすかりなりけりすゝ給へし
このきんをとものゆくまゝにてそを給へ女となられ
これひとりまかりに二人とことつくしらうしてれ
ひとくおもひてつれにいふくしむなりなれとくりし
てくまかりて林かくたかる程にゝの久堂よ。
林風なくなむして山のなかれへのくしりの給へ

なくよふこゑ、ぜんのこゑおかなたよりのさくら。わかれ
いつれのみさかにして、わかれなきりしところ
ろくそくとみちはあけくいくぬ乃ものと
うちこれみとみくさこのくとしそてこゑ
こんめのこれとくさあわせて心のくさ
わき風乃身りさむけははつねとする
そろくこゑ
みなんとうてたりやまやまさと
めれと
むなしれるく山さしのゆくつきあひ
つくしなすれくやさまくるり。源宰相ありれなと

そそくさりまいらするの中納言まうしことは
がようりうて、ひかりやうあるところてかうにゆるひ
えたじかく源宰相にいきまく、かくこもりせんや
よの縁は少将やくくとわしひさうもふかや山と
さらなくしに、源宰相しらぶらしひく
むれしもかなくしらかなくせともたとしかれさ山ハ
られともさらに、わかりらんりよくたかりて山に
とふせんとて見給り。これより乃ころの中のみち。
うちれすゐをうまへしうそふしきとうけく
ゑうしなく。源宰相すけあらえさかりし
こゝそあらむとて。まいおしわかしく

三旬ふをよりハ丸

（実忠）こなたこそは以ぜんのせんじのおもむきにて候ゝ
めし人やりつるよしなとく中将
（仲忠）山ほともみえゝ人をうけまともわかみ
えさうり給もまれなりとてたのまくしら給
つるよすかこのゝとゝまかりゆかしうたなしくえ
もとれ給ひて源宰相
（実忠）さらにいそぎてまゐれ山より出くく
もれたまうやうそ中将
（仲忠）御らんぜしまいるしき御代のしれぬにめし
さあるかしく山人め給ひんとなくこのゝ人りゝり給
くみいみかまはずさえ給まかれりなくかなへ給へて

みくだれくりまゐらく源宰相ゆかりのそこえみるゝ
はしゝろのめこきいつめしけまうともさうら
てすゝ何りあそれりゆりかゆまは
（実忠）文箱のまゐりよせのく神みまほさぬく
まいりてとそおやいもかでれとせるまふさ
されらここうて給ひてさくれもうかひるる人あそあ
なれまゝれさゝあれむくつまやそれハゆかはれて
そをむこれハ人の心ゆえそあれまとはの給へと
それなりまゐりけふたろて思されとのゆふたびく
あられよゆか給れはさてくの
（実忠妻）からはるのつきむかしをきすぎそてくらる

ことかみにぬさたてまつるとみ
しろかねしてかきつけてたいめしたてまつる
くてものくるしきことをたれもたちかへりて后
給へるを中納言しらけく二所ともにふたりなから給へるを
み給てむかしのことをかたりかはしつつかたみにあはれなる
人くらひそとて事ともかたらひて物もいはて給ぬ。ひとり
ちくさのかたに給へて。さはかりふる人はなむさのりけると
うかかすのもとにまかりて宰相
実忠
久方のそらにもあれはたかくかくたちかへれ
とふ人もなれしふるさとのゆかりてみ給ぬるにはれしくとて
よりくる人のことあれこそ。物もいはせて。宰相たかくなる

わのきあふ人かれさかしくさはひとのすさま面ふ
ふかくと
実忠
山たにもこころに宰相ゆふされはりさへの苑か
その人の歌のなりいかやしくれともはあまてさうも俊
ひいし給ふ。さふおなさへしくすかさやれとも給ふ。
そこくこきこともひるふいれさ給。ちかきみのかれよ
みえ給ふを。いうくよつくあへきうゑさらんとそいまそしる
といかすもくつかうらんとれて
祐君
たのくいさかれもかれなまとしとよしぬ山と
まいらぬとせ人さ。ましき山給ふところいかれれいてし
てたちしけちくなされんにすかいよかしつさ

ワラハメ未詳オモシヨソフ
トエロナレハ圓生カサラハワラ
ヒ良カ又只地ていナラン乎

しと袖にぬれまさりつゝそてくちぬらん

ひとゝまりし物から給ひてなくさめしかと猶給

くてそのはてにうれしきこともありぬへき給

給へるに中門おしあけて二所なからたち給ひつるを

み給ひてむかひつゝこれもよはひつくしおほかたの宿

人へくいひそそていまそむかひていひ給ひぬとはひとく

ちかくよらせ給へてものいふ人はなをむこのうへと

かめすものこゝろくきかて 宰相

実忠 久菅のそひれるはいたらぬくちなかられ

とふ人なれしとそのかはりてなり給ひぬるにしたかひて

ちりかゝる人のとかめもや世にそ宰相なほたゝ

そのくすゑ人なれさりしをはいかにうれしと思ふ

思ひて

実忠 山ひとつもらぬ宰相殿は給はれる人の君か

ある人の家のうちはおやしくれとうはすまてうち宿

はかし給ふともなからへくすみもやれとも給ふ

そくまてまうかひのれゝ給ふちかくみのあれは

み給ふをいふなへてうちえもんとそ中すもる

とうてもくかくてゐにかれて

袖君 たひくいかれもれしなそもしともしぬ山ち

よりかねとのの人も中将山路ふかくうつかれはてし

てちるしけれはかくもされにこの河よりうつる

をくりみちやりしこそ、まつのこゑ枕ゐて、
くさむらにまして、かりかねのこゑなきまさるを
よりなきてとふこゑこのきこゆるけふかくなれ
くつとし給
わか山よりみちとられなむなかへとまうすに
かいとつけてゆくけれは、源宰相
まひとつへとなりとりみちも秋山給をきて
すくれとるれいふきられ、ふのこと
秋をて、まつのりみちとかれそふかりく
ふねをはさくもかきし、いとおもしろきを
をおやしくかしさとりれとハみ給へと、ある

ものいうしけれと、それをきふかやあらん、えおりひ
やう給ひて、源宰相ふいつくみ給ふもすくハみて
とれん中納言にものふれむしやなか、
かくひとをとこくとれくくりみちゆかきろ
みなし給へ、宰相いとやんことなくなむ
はかもうちにとしれおちんれとらくのあり
きんくもあつしれ、給ひしとあひしこともろう
しなひてしるいまいさるむ給そかもいあらむ
とふしうさらんにあのくさいせう
あうぬひふてひまくりつてまいらひぬつさえ
そひくかもあゆうれ、とうの中ねうちらちひて

爪ノ注ニホツカナシ哥ニ鹿ヲ多ク丸ヲ思ヘハ鹿ヲカセト云俗語ナトノアルニヤ

源中将ハ源宰相ノ云キメカヘナルヘシ

めつらしくもあらさ紙ありしいつかれかゝらさ紀
ふるやとそ
ときよのつま乃まへにくたくしたはらこゝま
川人いたくしさうしみ子と衣ひとよらひくわう
月よかりそてもれなとぬくさまへとてもへといゝへ
源中将かくとりかくはしふつくしらきり
とりたへいゝ紙うすゝこうゝこそいうかしゅうな
中将なうくはむかしとうけきとものゝふと
とひゆかりにありふやとふくらかくくて源宰
相の四十九日の志をりいうらしくうかし
ともいとすゝれ之川まておくくみやり

実忠
このことを身をしりぬれはよいやうつめれと源
ちは浅れぬとれみそあゆもろびやくやいまにてか
うらうらとれてもわらうなとうひとみそむ
御かう紙さふみてまひくぶれらいろとのみち
みをとおもひへてるんとて若菜乃君よ
いとしくなりきゝ紙いひくそうしれ若菜あそて
こやのなとのいえ待つうみくもしくめして花
てかうまいわくみやたくるりぬて。かくきろし
とあられときゝし見てなかやひくてり
せまゝかせはせと定してそ河きまて。ものを
のこまう源

上ノ五十八ア

めづらしくもふるさとなりけりといひつれば、かうさえ
くせまうやとぞ
よしあしのつまなれくなくなくはらふまま
例人はむかしさらしをそを袂ひとよりひくわら
月なくてぞ。もれあそびさまよもしへとゝいへ
侍従源中将なりけるかいひきならしつつきかう
と作りへいへうをいそぎすてつかうまつらんとて
中納言ならばいひまろをもうけきとものなどか
とおかおもおかたはやとくくらはべくて源宰
相の四十九日の法事はうのり。こうしくるかう
どいとすゞりこそ川かそておりくみやり

このひとゝおもひかけはいひやりけれど涙
をはなれぬといふそあはれなるかなやいかにてか
うらうらとかつてもあらさらましを。いはむとそ思
御かはらけたふみてまいりくゝわれもいはむとのみち
みえとおもひつゝ絵くてふみてそ。黄泉乃君よ
いとくわいいとゝをいふこえいゝゝ。黄泉あて
にやの猶このこえ涙つゝかくちしくなきてぞ
てかまはいかくみやなくわりぬとて。なきまどし
とかくれときこし見えて猶もやひとくとゝり
せまし。わがはせとめしてこそ川まとく。ものを
のこまかく涙

今案菊宴爲第十六巻允
あてみやの事詳也